

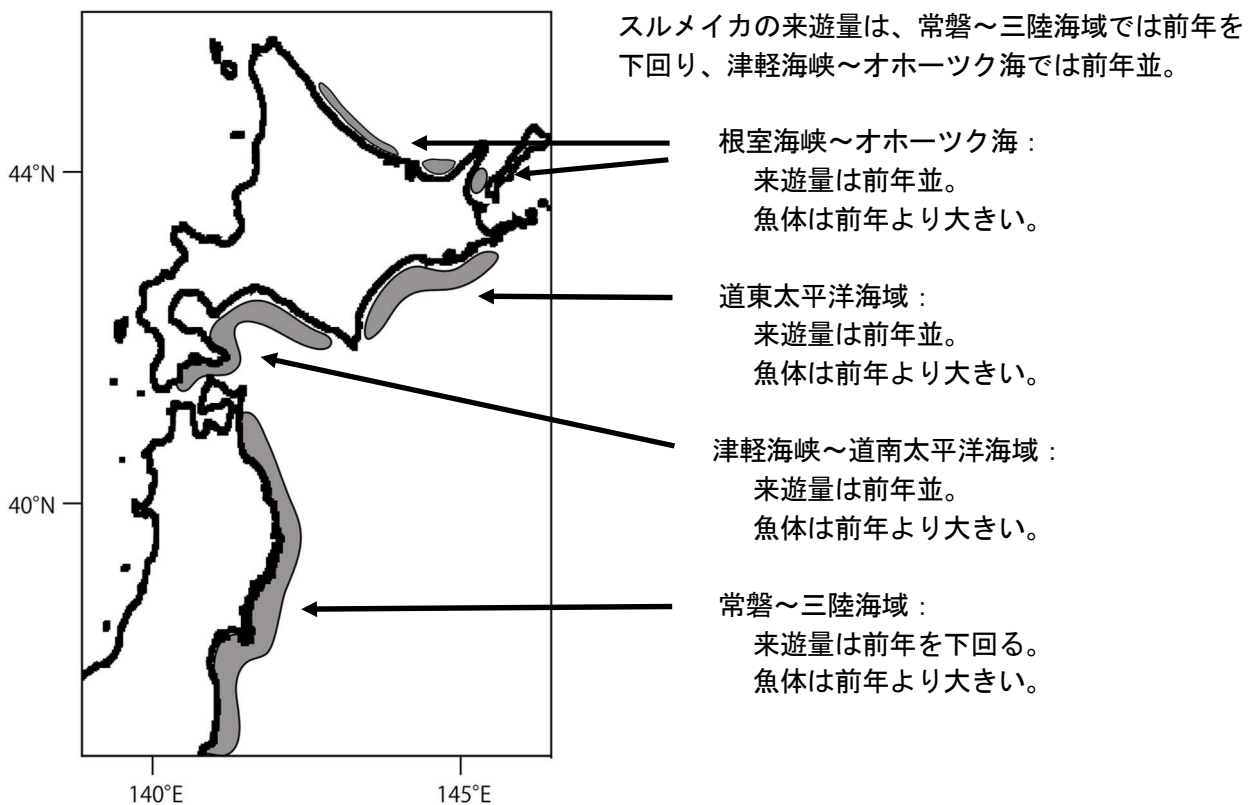


平成30年9月27日  
国立研究開発法人 水産研究・教育機構

## 平成30年度 第2回 太平洋スルメイカ長期漁況予報

— 別表の水産関係機関が検討し国立研究開発法人水産研究・教育機構  
北海道区水産研究所がとりまとめた結果 —

### 今後の見通し（平成30年10月～12月）のポイント



### 問い合わせ先

国立研究開発法人水産研究・教育機構 北海道区水産研究所

担当：業務推進部 島田、伴

資源管理部 川端、岡本

電話：011-822-2131、ファックス：011-822-3342

当資料のホームページ掲載先URL

<http://www.fra.affrc.go.jp/pressrelease>

# 平成30年度 第2回 太平洋スルメイカ長期漁況予報

## 今後の見通し（2018年10月～12月）

対象魚種：スルメイカ

対象海域：道東太平洋海域、根室海峡～オホーツク海、津軽海峡～道南太平洋海域、常磐～三陸海域

対象漁業：いか釣り、底びき網、定置網、まき網

対象魚群：主に冬季発生系群（2018年級群）

### 1. 道東太平洋海域（いか釣り、底びき網）

- (1) 来遊量：前年並。
- (2) 漁期・漁場：漁場形成は散発的、明瞭な主漁期は無い。
- (3) 魚体：前年より大きい。

### 2. 根室海峡～オホーツク海（いか釣り、定置網、底びき網）

- (1) 来遊量：前年並。
- (2) 漁期・漁場：明瞭な主漁期は無い。
- (3) 魚体：前年より大きい。

### 3. 津軽海峡～道南太平洋海域（いか釣り、定置網）

- (1) 来遊量：前年並。
- (2) 漁期・漁場：対象期間を通じて漁場となる。
- (3) 魚体：前年より大きい。

### 4. 常磐～三陸海域（いか釣り、底びき網、定置網、まき網）

- (1) 来遊量：前年を下回る。
- (2) 漁期・漁場：対象期間を通じて漁場となる。
- (3) 魚体：前年より大きい。

## I 予報の説明

2018年8月～9月に実施した漁場一斉調査と道東太平洋スルメイカ資源調査\*の結果（以降、いか釣り調査と総称する）、および7月～8月（一部9月を含む）の漁況経過を主要な情報として太平洋における10月～12月のスルメイカの来遊量を予測した。その結果、以下の通り、常磐～三陸海域では前年を下回り、津軽海峡～オホーツク海域では前年並と予測される。

\*北海道立総合研究機構釧路水産試験場が独自に実施。

### 1. 道東太平洋海域

この海域の漁獲対象資源は、太平洋沖合を北上する群が主体と考えられる。道東周辺海域（42°N以北、143°E以东）でのいか釣り調査による平均CPUE（いか釣り機1台1時間当たり漁獲尾数）は前年を上回ったが、有漁点は全10点中6点であり（前年は全10点で有漁）、CPUEの高い点は襟裳岬東側海域に限定されていた。また、本年は8月6日に厚岸港にて初水揚げがあったものの、道東太平洋海域の港における8月末までの水揚げは同日同港のみであり、水揚げ量は僅か0.2トンであった（前年は皆無）（表1）。9月以降の水揚げ量は前年を上回っているものの、その水準は低く、近年5年（2012年～2016年）平均を大きく下回っている（表1）。以上のことから、道東太平洋海域への来遊量は前年並に低い水準になると予測される。そのため、漁場形成は前年同様に散発的になり、明瞭な主漁期が無いままに終了すると予測される。魚体サイズは、いか釣り調査の結果から前年より大きい個体が主体になると考えられる。

### 2. 根室海峡～オホーツク海域

この海域の漁獲対象資源は、太平洋沖合を北上する群が主体と考えられる。7月～8月の道東での水揚げ量は上述の通りごく僅かであったことから、同時期の沿岸域への来遊量は前年並に少なかったと考えられる。釧路以東（144.4°E以东）でのいか釣り調査によるCPUEは前年を下回った。国後島の太平洋側沿岸域における9月中旬までの平均海面水温\*、およびそれ以降10月までの予測水温\*\*は例年・前年よりも低く、スルメイカが太平洋からオホーツク海へ回遊しやすい環境ではないと考えられる。以上のことから、根室海峡～オホーツク海域への来遊量は前年並に低い水準になると予測される。また、前年同様に、明瞭な主漁期が無いままに終了すると予測される。魚体サイズは、いか釣り調査による釧路以東での結果から前年より大きい個体が主体になると考えられる。

\*気象庁の札幌管区气象台が公表している日別海域平均海面水温（<https://www.data.jma.go.jp/gmd/kaiyou/data/db/kaikyo/series/engan/engan124.html>）

\*\*国立研究開発法人水産研究・教育機構により開発され、2012年5月より運用を開始した海況予測システム（FRA-ROMS）による予測水温

### 3. 津軽海峡～道南太平洋海域

この海域の漁獲対象資源は、津軽海峡～道南太平洋海域に分布する群と道東太平洋海域から南下する群が主体と考えられる。津軽海峡～道南太平洋周辺海域（41°N以北、143°E以西）におけるいか釣り調査のCPUEは前年を上回った。浦河港での8月の小型いか釣り船CPUE（1日1隻当たり水揚げ量）および漁獲量は前年を上回ったが、函館港と大畑港ではともに前年を下回った（表1）。また、道東太平洋海域への来遊量は前年並に低い水準と予測される（前述）。以上のことから、津軽海峡～道南太平洋周辺海域への来遊量は前年並と予

測される。魚体サイズは、いか釣り調査の結果から前年より大きい個体が主体になると考えられる。

#### 4. 常磐～三陸海域

この海域の漁獲対象資源は、常磐～三陸海域に分布する群と道東太平洋海域から南下する群が主体と考えられる。三陸周辺海域（41° N以南、143° E以西）におけるいか釣り調査のCPUEは前年を下回った。青森県白糠以南における8月の小型いか釣り船のCPUEは前年並、漁獲量は前年を下回った。全漁法\*による漁獲量も前年を下回った。したがって、常磐～三陸海域に分布する群は前年を下回ると考えられる。また、道東太平洋海域への来遊量は前年並に低い水準と予測される（前述）。海況予測システムFRA-ROMSによると、親潮は三陸の沖合を南下すると予測されていることから（図1）、沿岸域へは道東太平洋海域からの南下群が来遊しにくい環境であると考えられる。以上のことから、常磐～三陸周辺海域への来遊量は前年を下回ると予測される。本年のいか釣り調査では同海域で1尾しか漁獲が無かったため、魚体サイズの比較には道東太平洋海域での結果を利用した。前年の調査では小型個体（外套背長20 cm以下）が多く漁獲され、それに対応するように10月から三陸海域水揚げ物のサイズ組成が全体的に小さくなった。一方で、本年は調査にて同様の小型個体がほとんど漁獲されていない。以上のことから、10月以降は前年より大きい個体が主体になると考えられる。

\*いか釣り、定置網、底びき網、まき網

## II 調査結果

8月～9月に実施されたいか釣り調査の結果（図2）、調査海域全体の平均CPUEは1.00尾で、前年（0.55尾）を上回った（図3）。道東周辺海域では2.62尾であり、前年（0.60尾）を上回った。道東周辺海域のうち釧路以東では0.19尾であり、前年（0.38尾）を下回った。津軽海峡～道南太平洋周辺海域では0.92尾であり、前年（0.74尾）を上回った。三陸周辺海域では0.02尾であり、前年（0.74尾）を下回った。

漁獲物の外套背長組成は、最頻値が22 cmにある単峰型の組成で、全体的に前年よりも大型であった（前年は17 cmと22 cmに山がある双峰型）（図4）。海域別に見ると、道東太平洋海域での最頻値は22 cmで前年（22 cm）並であったが、20 cm以下の割合は前年よりも小さかった。道東太平洋海域のうち釧路以東では最頻値が24 cmにあり、前年（22 cm）より大型であった。津軽海峡～道南太平洋周辺海域での最頻値は21 cmにあり、前年（16 cmと20 cmの双峰型）よりも大型であった。三陸周辺海域では漁獲物が1尾（23 cm）のみであったため、前年との比較はできない（前年は31尾漁獲され、最頻値は17 cm）。

## III 各海域の漁況経過

2007年以降の太平洋（根室海峡～オホーツク海を含む）における年間漁獲量（暦年集計）\*は7万～16万トンで推移していたが、2016年には2.7万トン、2017年には2.2万トンに減少した（図5）。10月～12月に限定した累計漁獲量は、2007年以降5万～10万トンで推移していたが、2016年には9.1千トンに減少し、2017年は9.7千トンであった。主漁場は常磐以北の太平洋海域であり、来遊経路から常磐～三陸海域、津軽海峡～道南太平洋海域、道東太平洋海域、根室海峡～オホーツク海域に区分される。2017年10月～12月の常磐～三陸海域における漁獲量（生鮮）は5.5千トン、津軽海峡～道南太平洋海域では4.1千トン、道東太平洋海域では0.1千トン、根室海峡～オホーツク海では0.3千トン（図6）、千葉県以南の海域での漁獲量は22トンであった。近年5年（2012年～2016年）平均比は、常磐～三陸海域では32%、津軽海峡～道南太平洋海域では43%、

道東太平洋海域では3%、根室海峡～オホーツク海では2%、千葉県以南の海域では58%であった。

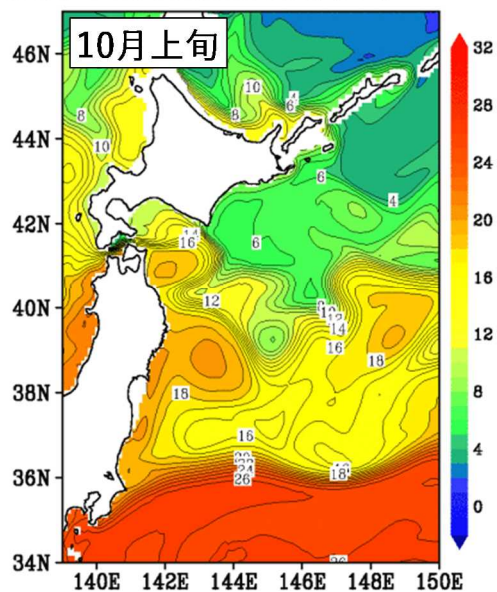
2018年7月～8月の太平洋沿岸域での水揚げ量\*\*（生鮮：速報値、一部未集計）は2.4千トンで、前年（4.5千トン）を下回った。そのうち、常磐～三陸海域の主要港では1.4千トンで、前年（3.8千トン）を下回った。津軽海峡～道南太平洋海域の主要港では1.1千トンで、前年（0.8千トン）を上回った。道東太平洋海域の主要港では0.2トンであった（前年は皆無）。根室海峡～オホーツク海での水揚げは前年同様に無かった。千葉県以南の主要港では90トンで、前年（74トン）を上回った。なお、参画道県における代表的な漁況経過を表1に示した。

\*主要港漁獲量を漁業・養殖業生産統計年報の漁獲量で引き延ばしているため、図5および図6を含めた漁獲量は全て推定値である。

\*\*水揚げ量は単純積み上げた数値。

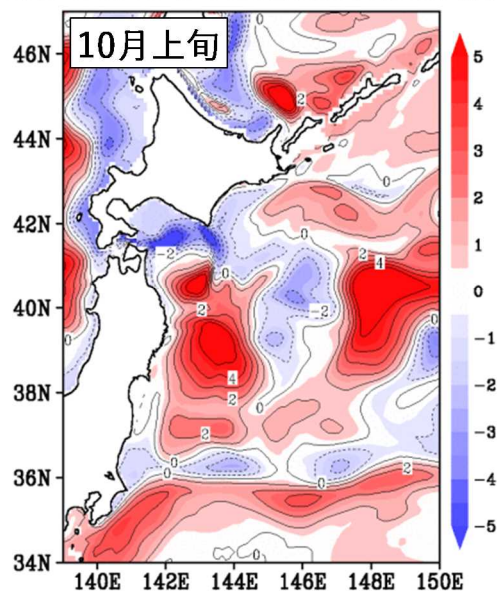
FRA-ROMS

2018/10-early Temperature[°C] (50m)



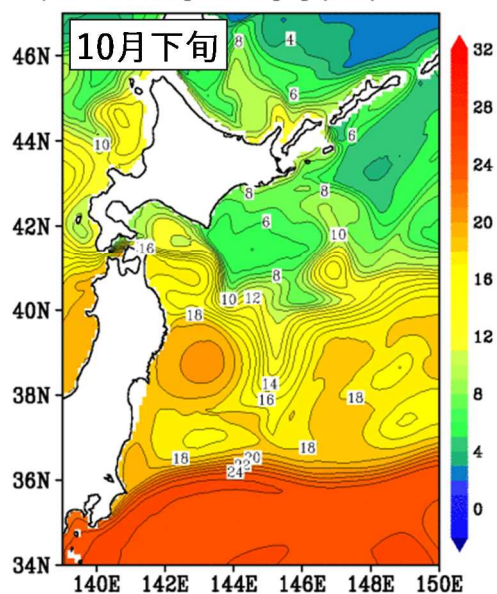
FRA-ROMS

2018/10-early Temp. anomaly(Average year)[°C] (50m)



FRA-ROMS

2018/10-late Temperature[°C] (50m)



FRA-ROMS

2018/10-late Temp. anomaly(Average year)[°C] (50m)

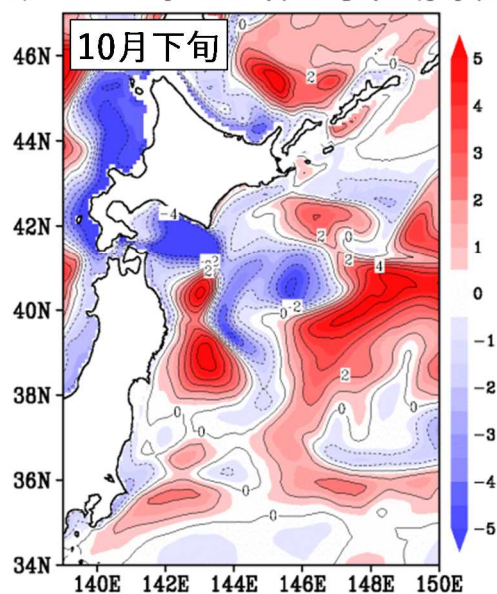


図1. 海況予測システムFRA-ROMSによる2018年10月上旬と下旬の50 m深\*予測水温 (左図)

および平年差 (右図)

右図の青色は平年より水温が冷たい海域を示し、赤色は温かい海域を示す

\*スルメイカの代表的な分布深度

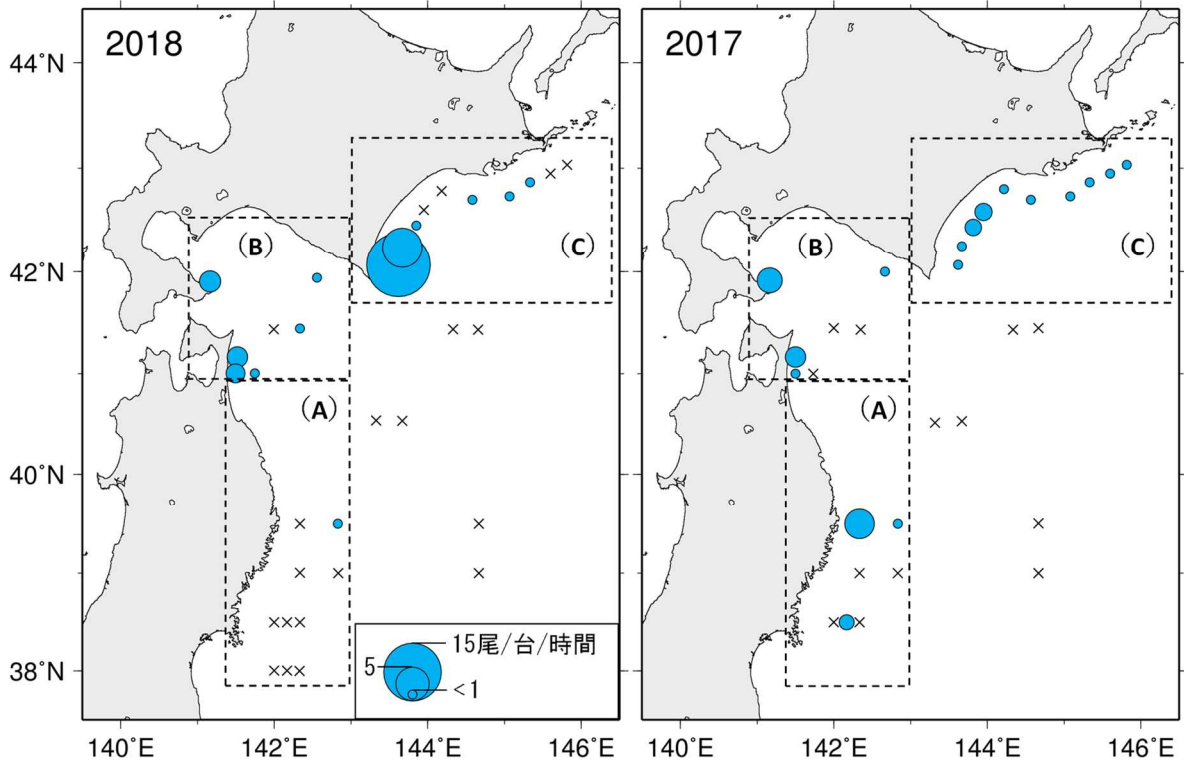


図2. 太平洋におけるいか釣り調査によるスルメイカのCPUE（いか釣り機1台1時間当たり漁獲尾数）の分布

2018年8月～9月（左図）、2017年8月～9月（右図）のいか釣りによるスルメイカのCPUE

（いか釣り機1台1時間当たり漁獲尾数）の分布を左図右下の凡例にしたがって示す（×は漁獲なし）。破線で囲まれた海域は（A）常磐～三陸周辺海域、（B）津軽海峡～道南太平洋海域、（C）道東太平洋海域および根室海峡～オホーツク海域における来遊量予測の根拠となった調査海域を示す

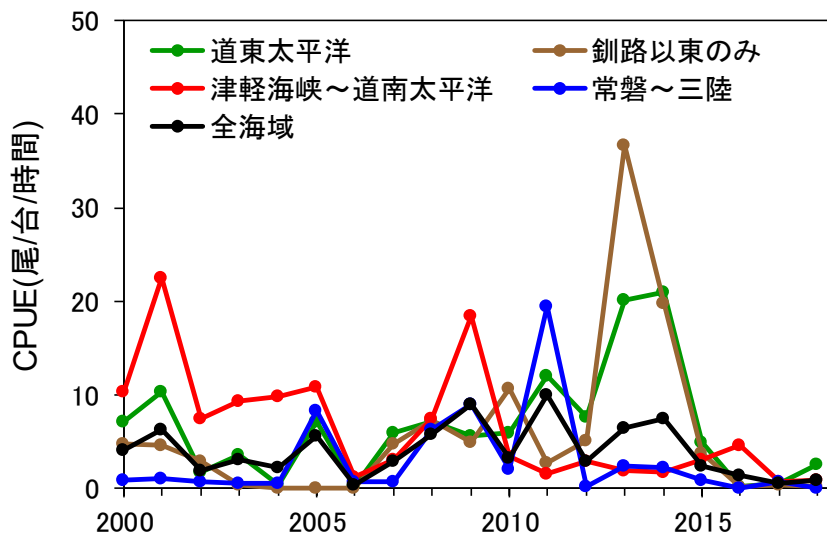


図3. 太平洋におけるいか釣り調査による海域別CPUEの年推移



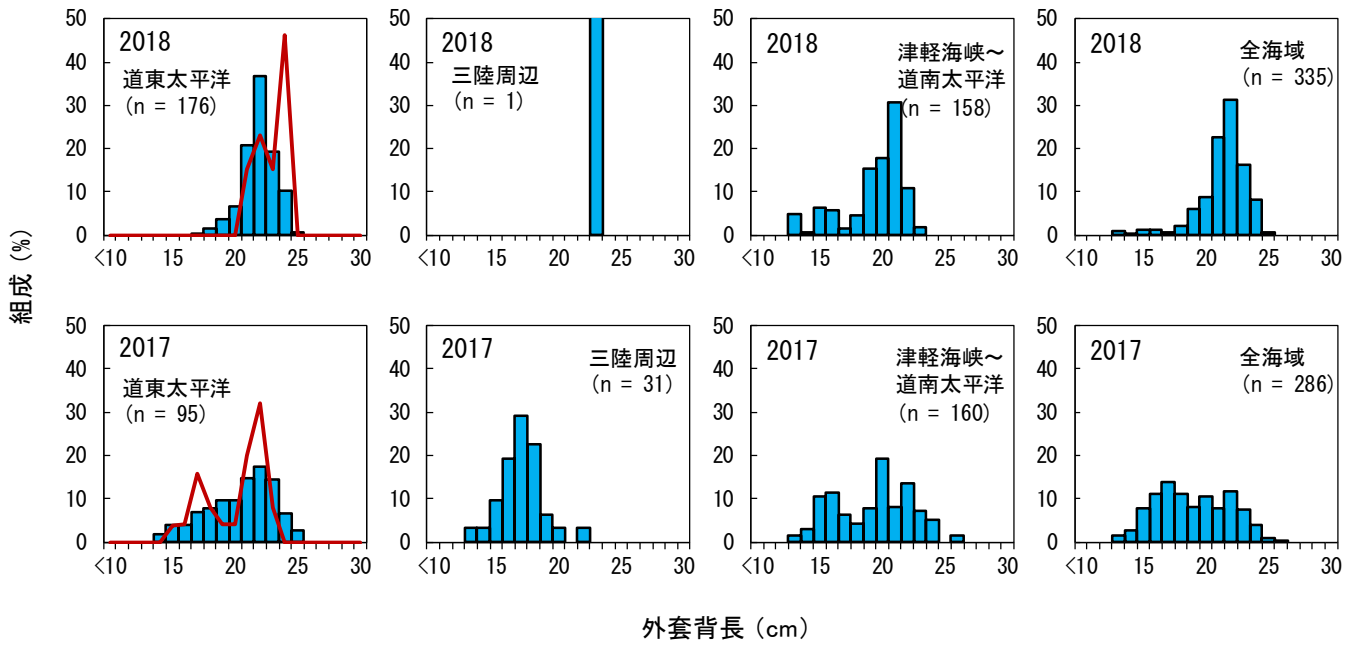


図4. 太平洋におけるいか釣り調査によるスルメイカ外套背長組成の結果  
 nは測定尾数を示し、最左図の赤線は道東太平洋海域の釧路以東のみの結果を示す

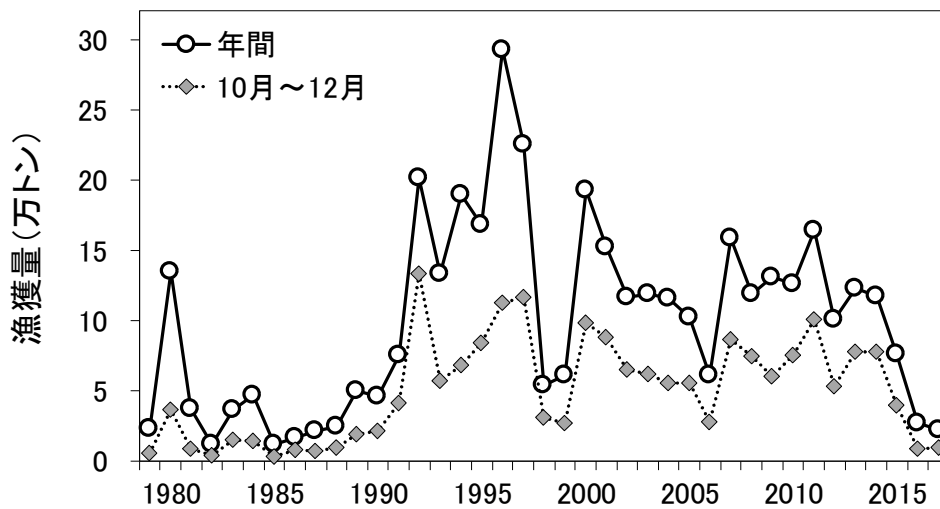


図5. 太平洋（根室海峡～オホーツク海を含む）におけるスルメイカの年間漁獲量（暦年集計）と10月～12月の累計漁獲量の推移



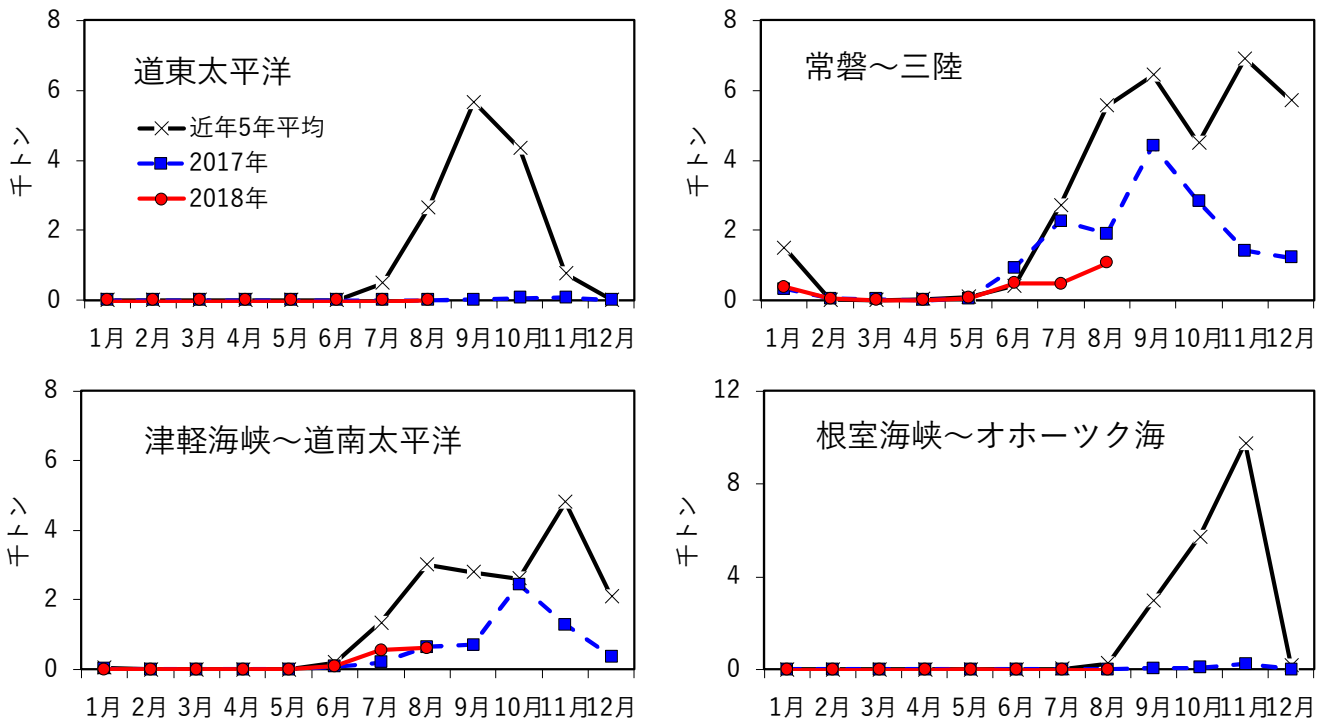


図6. スルメイカの月別海域別の漁獲量（生鮮）  
 近年5年平均は2012年～2016年の平均  
 （いか釣り・定置網・底びき網・まき網）

表1. 漁況経過（2018年7月～8月、一部9月・未集計・暫定データ含む）

	漁況経過
北海道 道東	<p>本年の初水揚げ日は8月6日（厚岸港、釣り）で、前年（釧路港で9月2日、底びき）より早かった。8月までに水揚げした船は同日の1隻のみで、水揚げ量は僅か0.2トンであった。</p> <p>9月以降、道東主要港にて1日平均で約3トンの水揚げがあるものの（9月24日現在）、近年5年平均（約215トン）*を大きく下回っている（2017年同期は約0.5トン）。</p> <p>羅臼港では、9月24日に0.1トンの初水揚げがあった（前年は9月8日に0.3トンの初水揚げ）。</p> <p>*2012年～2016年平均</p>
北海道 道南	<p>函館港での釣りによる8月の水揚げ量は65トンで前年比36%、CPUEは前年比54%であった。</p> <p>浦河港での釣りによる8月の水揚げ量は158トンで前年比3216%、CPUEは前年比139%であった。</p>
青森	<p>大畑港での釣りによる8月の水揚げ量は32トンで前年比32%、CPUEは前年比47%であった。</p> <p>白糠港での釣りによる8月の水揚げ量は32トンで前年比33%、CPUEは前年比67%であった。</p> <p>八戸港での釣りによる8月の水揚げ量は193トンで前年比79%、CPUEは前年比117%であった。</p> <p>八戸港でのまき網による8月の水揚げ量は438トンで前年比47%であった。</p> <p>八戸港での底びき網による9月上旬の水揚げ量は1,126トンで前年比165%であった。</p>
岩手	<p>岩手県主要港での釣りによる8月の水揚げ量は233トンで前年比66%、CPUEは前年比115%であった。定置網による8月の水揚げ量は40トンで前年比57%であった。</p>
宮城	<p>宮城県主要港での釣りによる8月の水揚げ量は4トンで前年比211%、CPUEは前年比44%であった。定置網による8月の水揚げ量は2トンで前年比57%であった。</p>
福島	<p>7月～8月は底びき網漁業の禁漁期間である。</p>
茨城	<p>7月～8月は底びき網漁業の禁漁期間である。</p>
千葉	<p>千葉県主要港での定置網による8月の水揚げ量は5kgで前年比1%であった。</p> <p>釣りによる8月の情報は集計中。</p>
神奈川	<p>間口港での釣りによる8月の水揚げ量は0.3トンで前年比49%、CPUEは前年比49%であった。</p>
静岡	<p>仁科港での釣りによる8月の水揚げ量は2トンで前年比62%、CPUEは前年比127%であった。</p>
三重	<p>三重県主要港でのまき網による8月の水揚げ量は2トンで前年比280%であった。釣りと定置網による8月の情報は集計中。</p>
和歌山	<p>すさみ港での釣りによる8月の水揚げ量は10トンであった（前年は漁獲無し）。</p>
高知	<p>加領郷港での釣りによる8月の水揚げ量は5トンで前年比57%であった。</p>

注：CPUEは1日1隻当たり水揚げ量

## 参 画 機 関

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構 水産研究本部 釧路水産試験場 函館水産試験場	三重県水産研究所
地方独立行政法人 青森県産業技術センター 水産総合研究所	和歌山県水産試験場
岩手県水産技術センター	高知県水産試験場
宮城県水産技術総合センター	一般社団法人 漁業情報サービスセンター
福島県水産資源研究所	国立研究開発法人 水産研究・教育機構 東北区水産研究所 日本海区水産研究所
茨城県水産試験場	(取りまとめ機関) 国立研究開発法人 水産研究・教育機構 北海道区水産研究所
千葉県水産総合研究センター	
神奈川県水産技術センター	
静岡県水産技術研究所	